

「百年に一度の経済危機」「世界恐慌に匹敵する経済の負の成長」…。こうした大きな見出しが新聞の一面に登場している。グローバル化した経済が逆回転を始めた結果だという。こうした報道に接し、現代社会がある種のネットワーク構造に似てきた結果ではないかと思う。正確に言えば似てきてはいるが、完全ではない一つのネットワーク構造と言つた方がいいかもしない。

機能体の本質はネットワークであるとする考え方がある。そのネットワークには、「ランダムネットワーク」と「スケールフリー」と呼ばれるネットワークの二つの種類がある。自然界ではスケールフリーのネットワークが多い一方、鉄道、高速道路、送電線など、人為的につくり上げられたネ

今を読む

長崎大熱帯医学研究所教授

山本 太郎



やまもと・たろう 1964年竹原市生まれ。長崎大学医学部卒業。外務省国際協力局課長補佐などを経て昨年から現職。著書に「新型インフルエンザ」「ハイチいのちとの闘い」など。長崎市。

ツトワークはランダムである結果、スケールフリーのネットワークは多数のサイトを持つながら点は「中核ネットワークとしての特徴」と呼ばれ、膨大な数のポイントが破壊されたとしても迂回経路が残り続けることが多い。ネットワークは多数のサイトを持つながら点は「中核ネットワークとしての特徴」と呼ばれ、膨大な数のポイントが破壊されたとしても迂回経路が残り続けるといった利点がある。

その結果、偶發的事故や確率論的に起こる故障に強く、ネットワークでは、幾つかのポイントが破壊されたとしても迂回経路が残り続けるといった利点がある。

しかし一方で、このスケールフリーのネットワークには欠点もある。幾つかのローン問題に端を発した金融危機は短期間に世界全体を駆け巡り、世界経済システム全体に影響を与えるよう

は、いくつかのポイントが破壊されるとネットワークが断片化され、ネットワークをつくり上げようと努力している。しかし一方で、そうした社会では、機能的に重要な地點で発生した不具合が一気にシステム全体へと及ぶ。

自然の「ゆとり」に学べ

危機管理のヒント

ネットワークは、志向性や規則性がなく無作為に張らる。そのため、インターネット上では常にどこか故障していることが多い。また、生体内ではもしかわらず、ネットワーク全体として大きな混乱は生じない。また、生体内では常にある細胞が死滅し、ここに、現在の危機管理のリンクを持つことになる。

長性(リダンサンシー=冗長性)と呼ばれてきた。そうしたゆどりは「冗長性(リダンサンシー=冗長性)」と呼ばれてきた。

edundancy)」と呼ばれたりしてきた。その後、享受する利益の分配だけでなく、不経済な部分も分担するシステムができるかもしない。

は常にある細胞が死滅し、ここに、現在の危機管理のヒントがあるのではない。うした無駄をこそ、社会が機能的でなければ生き残れない。しかし一方で、そうした社会では、機能的に重要な地點で発生した不具合が一気にシステム全体へと及ぶ。

た社会では、機能的に重要な地點で発生した不具合が一気にシステム全体へと及ぶ。